

発達検査でわかること②									
新版K式発達検査をめぐって							その6		
							大谷多加志		

今回は連載の初回に取り上げた「発達検査でわかること」を再びテーマにします。

第10号で、友人に“発達検査に関わる仕事をしている”と話したら白衣を着て脳波測定をしていると思われた、というエピソードを書きました。このエピソードはいささか極端でしたが、発達検査がどのようなものなのかということは、検査に関わる人以外にはやはり実感しにくいかもしれません。

先日、福祉領域で働く友人と話す中で、発達検査のことが話題になりました。その友人は発達検査を実施してはならず、知的障害を持つ方の直接的な支援に携わっています。利用者の方が児童相談所などで受けられた発達検査の結果などを資料として目にすることがあり、彼は「支援を考える中で1つの基準としていた」と言います。発達検査の結果と言っても、発達年齢や発達指数など、ごく限られた情報だけだったようですが、それでも利用者の方の発達段階を考慮する一つの軸となり、それによって“ここはもう一歩粘ってやってみよう”とか“環境設定を整えて乗り切ろう”と判断することもあったそうです。その一方で“発達指数ってどのようなものなのか？”“発達検査の有効性や限界って何なのか？”という素朴な疑問もあったと言います。この時の会話が、初回のテーマをもう一度取

り上げてみようと思ったきっかけです。

IQって何？

発達検査の結果として求められるものに、発達年齢 (Developmental Age : DA) と発達指数 (Developmental Quotient : DQ) があります。DQ という言葉は聞き馴染みがないかもしれませんが、IQ (Intelligence Quotient) と言われると、今度はピンとくるのではないのでしょうか。知能検査の結果を表す IQ という言葉自体は、一般に広く知られたものだと思います。インターネットで検索すると、色々な人物、キャラクターの IQ に関する記述が発見できます。キャラクターが高度な知能を持っていることを示す指標として用いられており、アニメや漫画では IQ が 200、300 などというキャラクターも登場します。

大学で初めて知能検査について学んだ時、講師の先生から次のように問われました。「IQ200とかIQ300の人が、実際にいると思いますか？」最初は簡単に答えられる気がしましたが、考え始めると思いがけず答えに窮しました。IQの平均が100であるということは知っていましたから、200とか300とかはいささか現実離れした数字のように思えました。しかし、何万人、何十万人に一人とい

う天才なら、そのくらいの数字になってもおかしくないのではという思いも浮かんできました。

答えを先に言うと、「そのような人はまずいない」です。理由は、IQがどのように算出されるか、ということと関係しています。IQは以下の式から求められます。

$$\text{精神年齢} \div \text{実際の年齢} \times 100 = \text{IQ (比IQ)}$$

10歳の子どもが知能検査を受けたとしましょう。知能検査の結果求められた精神年齢(Mental Age)が12歳だった場合は、 $12 \div 10 \times 100$ という計算で、IQ120となるわけです。IQ200とか300という数字を出すためには、実際の年齢が20歳の人だと精神年齢で40歳とか60歳という結果を出す必要があります。しかし、知能検査で算出される精神年齢の上限はそこまで高くありません。検査法上の限界として、そもそもIQ200とか300という数字は出ないということです。もちろん、3歳の子どもの精神年齢が6歳とか9歳であれば計算上あり得るのですが、現実的にはほとんどありえず、例外的と考えてよいでしょう。この方法によって算出されるIQは、比IQと呼ばれます。精神年齢と、実際の年齢の比率を示したものだからです。

IQには先に挙げた比IQとは別の方法で算出されるものがあります。偏差IQと呼ばれるもので、最近の知能検査では偏差IQが主流になってきています。偏差IQは学校の成績表で馴染みのある「偏差値」と同様のものです。比IQとは違い、同一年齢の集団の中でのその人の位置を数値化したものです。偏差IQの考え方を示したものが図1です。

正規分布とは、一言で言えば、平均付近ほ

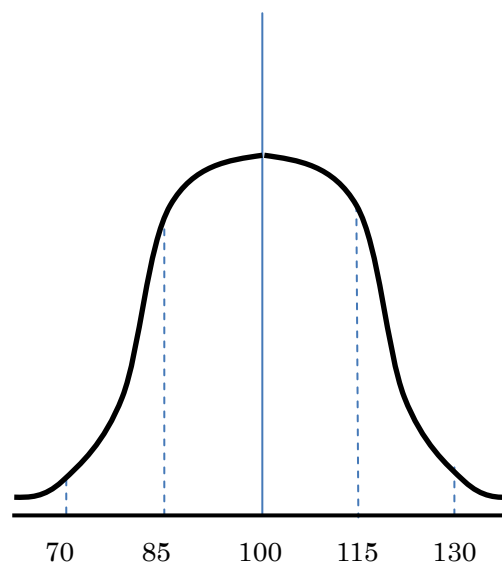


図1. 正規分布と偏差IQ

ど人数が多く平均から離れるほど人数が少なくなっていく分布のことです。偏差IQも平均は100になります。しかし、比IQが精神年齢と実際の年齢の比率を表しているのに対して、偏差IQは同一年齢集団の中での位置を示しています。細かな解説は省きますが、同一年齢の集団の中での上位約2%がIQ130以上に、下位約2%がIQ70以下になっています。

比IQと偏差IQは性質が全く異なります。検査法によって比IQを用いるものと偏差IQを用いるものがありますので、IQの数字を見る時にこの点には注意が必要です。

IQが示すもの

では知能検査の結果として算出されたIQをどのように扱えばよいのでしょうか。検査法によっては、知能指数と知的水準の関係を明示しているものもあります。決められた数字を基準にして知的水準を、平均域、境界域、軽度知的障害というように区分するわけです。

新版K式発達検査は、発達指数と知的水準について検査法上の基準は設けていません。

しかし、療育手帳の判定業務など、障害程度の判断を求められる現場で用いられる場合には、自治体等が設けた基準となる数値のもと、障害程度が判断される場合もあります。

一般に、障害程度の判断においては、知能検査などフォーマルなアセスメントで求められる結果だけでなく、日常生活の能力、行動上の問題の程度も併せて総合的に判断することになっています。しかし、「個々の生活状況を考慮し始めるとキリがなく、基本的には検査の結果を根拠に判断せざるを得ない」という現場の声も聞きます。

数値は絶対か

数値に依る判断にはリスクもあります。特定の数値を基準とした場合、その数値の前後で判断が分かれるわけですが、検査の数値はそこまで精密なものではありません。新版 K 式発達検査の場合、1つの項目の通過・不通過の評価が違えば、指数が 2~3 程度変化する場合があります。第 11 号で述べたように、通過・不通過の判断に迷う反応に出会う場面は決して少なくありません。通過・不通過のいずれと判断するかで例えば障害程度の区分が変わる可能性がある場合、判断はより難しいものになっていきます。

また、測定誤差を考慮した信頼区間を示す知能検査もあります。その人の IQ がどの範囲に収まるかを示したもので、例えば結果として IQ90 と出たとしても信頼区間では 85~98 のようにある程度幅を持って示されます。当然、信頼区間が障害程度を区分する数値をまたぐ形になることもあります。

知能検査にせよ発達検査にせよ、結果として求められた数値は、その人の知能や発達の水準を理解する 1つの目安になります。客観的な指標として一定の信頼を置きつつ、しか

し決して数値だけにとらわれない姿勢が、検査を利用する全ての人に求められると思います。

「発達検査の持つイメージ」

ここまで、主に知能検査・発達検査の数値的な結果に注目してきました。今回この部分に焦点を当てたのは、「数値」や「区分」という検査に関連する要素が、検査のイメージを形成していると感じているからです。

発達検査を用いて仕事をする人たちの悩みの 1つに、発達検査を受けることを勧めたものの保護者にやんわりと拒否されたり、承諾してもらえた場合でも保護者が不安そうな表情をされたりすることが挙げられます。

支援者は「発達検査は子どもを理解し、支援するためのもの」と考えていますので、「どうしたら保護者に安心して受け入れてもらえるか」とよい説明がないかと思案します。しかし、支援者の心情もわかるのですが、「保護者がそう思うのも無理はないこと」という思いがまず先に立ちます。このことは、「数値」と「区分」に代表されるように、発達検査がどのように用いられてきたかということと無関係ではないと思います。

次号はこの点について引き続き考えていきたいと思います。

バックナンバー

- 第 10 号 [発達検査でわかること](#)
- 第 11 号 [通過・不通過](#)
- 第 12 号 [解釈・見立て・所見](#)
- 第 13 号 [検査手続き](#)
- 第 14 号 [導入](#)